

ヒト胚研究に関する国民の意識調査概要

調査の目的

ヒト胚の研究利用など、国としての取り扱いのあり方が議論されている生命科学技術に対する国民一般の認知や問題意識の状況を、アンケート調査によって把握した。

調査設計

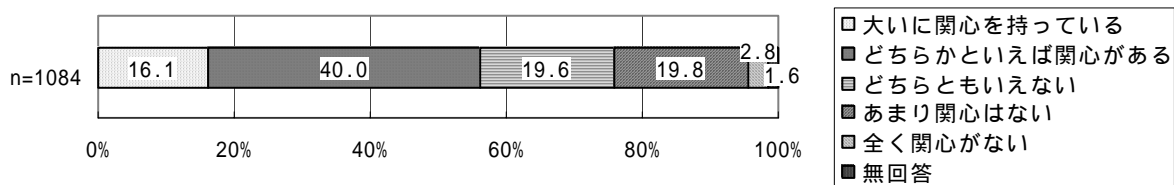
- (1) 対象 全国 20 歳以上の成人男女 4000 人を無作為抽出。
- (2) 方法 質問紙による郵送返送法 (督促 1 回)
- (3) 実施期間 3 月 1 日発送 3 月 25 日分まで回収
- (4) 回収状況 有効回答数 ; 1084 件 (27.1%)

調査のまとめ

(1) 生命科学技術への関心の度合い

生命科学技術動向への関心度合い

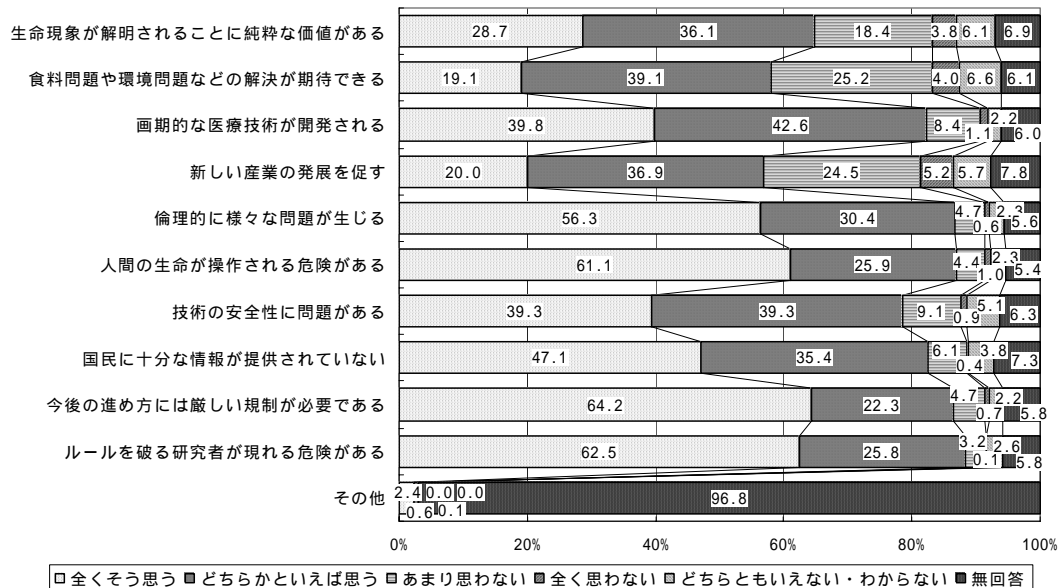
[全体]



- ・ 6 割近くが生命科学技術に関心を持っていることが明らかにされ、その関心の高さをうかがうことができた。関心がない割合はほぼ 2 割であった。

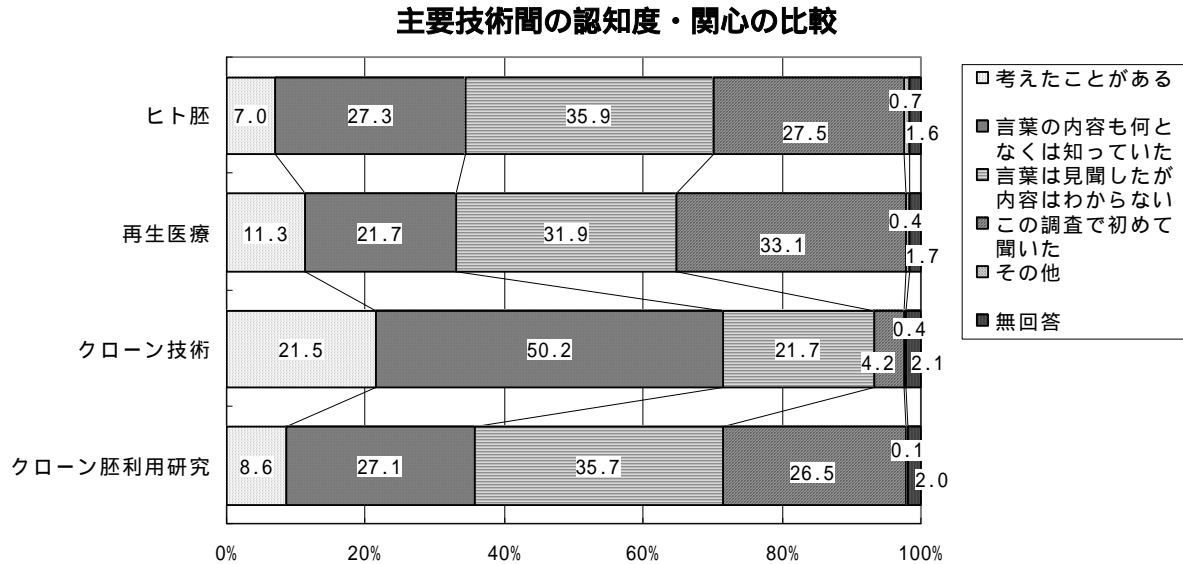
- (2) 上記の問で、「大いに興味を持っている」、「どちらかといえば興味がある」、「どちらともいえない」と回答した人に対して、期待や問題意識についてたずねた。

現在の生命科学技術に対する関心（期待や問題意識）



- ・「画期的な医療技術が開発される」は「全くそう思う」、「どちらかといえば思う」を合わせて8割を超え、「生命現象が解明されることに純粋な価値がある」、「新しい産業の発展をうながす」、「食糧問題や環境問題などの解決が期待できる」等もほぼ6割の割合であった。
- ・そうした期待意識と並存して、「今後の進め方には厳しい規制が必要である」、「ルールを破る研究者が現れる危険がある」、「人間の生命が操作される」、「倫理的に様々な問題が生じる」等について、いずれも8割を超え、生命科学技術の倫理的な問題や適切な運用の問題が、差し迫った問題として認識されている。
- ・自由記述では、生命科学技術に対する懸念や不信は、生命科学技術それ自体の倫理的な問題点というよりは「いくら規制を厳しくしても、いつかはルールを破る研究者が現れるのではないか」など、研究者のモラル及び研究ルールの運用に向けられていた。反対に、「研究に対する厳格な規制を前提条件として人間の将来にとって有用ならば研究の道は閉ざさなくてもよい」という趣旨の記述も多かった。
- ・以上のことから、国民の中には、今日の生命科学技術に対する期待は、医療技術の飛躍的な発展を中心に、少なからず存在しているが、そうした期待意識と並存して、生命科学技術の推進により発生する倫理的な問題、研究者のモラルや研究規制の確立が、差し迫った問題として、より強く認識されているといえる。

(3) ヒト胚、再生医療、クローン技術、クローン胚利用研究の認知・関心について

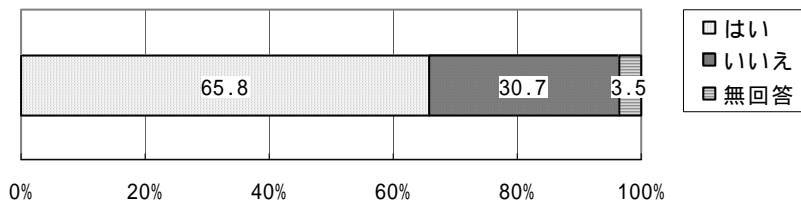


- クローン技術については、「考えたことがある」、「言葉の内容も何となくは知っていた」と合わせて7割を超え、ヒト胚、再生医療、クローン胚の問題と比較して、国民により情報が浸透している状況が見受けられた。
- ヒト胚、再生医療、クローン胚の間で、認知・関心についての大きな差異はなく、およそ3割の割合であった。
- 自由記述では、「クローン人間の生成は絶対厳禁」としながらも、「医療向上を目的とした研究の道は閉ざすべきではない」といった趣旨の意見が多かった。

(4) クローン技術規制法の認知について

クローン技術規制法の認知度

[全体]

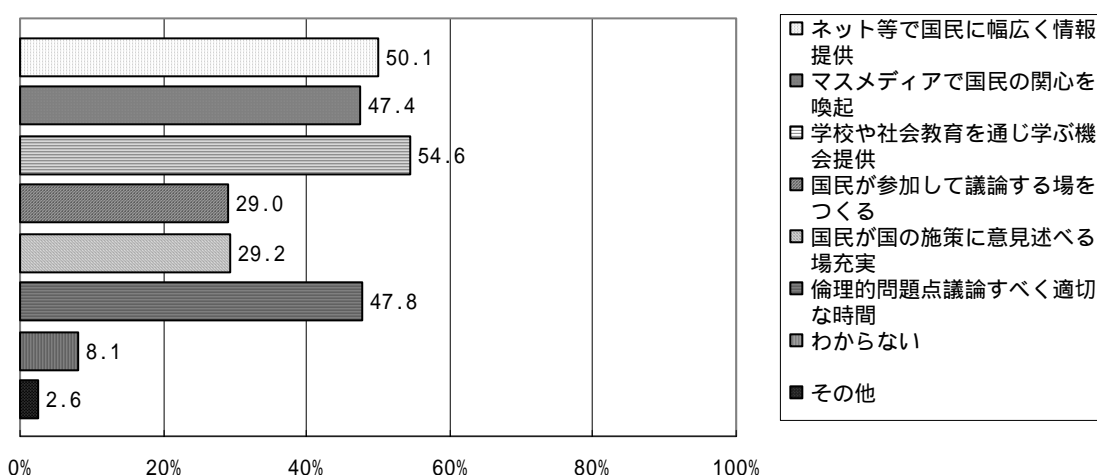


- ・ クローン技術規制法によりクローン人間の生成が刑事罰に相当することは、今回の調査では6割以上認知されており、周知となりつつあることがうかがえた。

(5) 国民の意見を反映した研究推進のために何を充実すべきか

国民の意見を反映した研究推進のために充実すべきこと

〔全体〕



- ・ 「学校教育や社会教育を通じた学ぶ機会の提供」、「ネット等で国民に幅広く情報を提供する」、「マスメディアで国民の関心を喚起する」が、ほぼ5割の高い割合であった。これに対し、「国民が参加して議論する場をつくる」、「国民が国の施策に意見を述べる場の充実」に関しては3割ほどで、情報提供に比較して低く、まずは、生命科学技術に関する適切な情報提供、学習の場が求められている。
- ・ 「倫理的問題点を議論すべく適切な時間をかける」もほぼ5割の高い割合であり、自由記述では、ヒト胚研究の倫理的な懸念として、国民的な議論・コンセンサスの不足から時期尚早とする意見が多かった。
- ・ 従って、国民が、生命科学技術の推進について、倫理的な面から、国民の一定の理解と納得が必要な重要課題として捉えていること、さらには、現段階ではそれがまだ必ずしも十分ではないという意識が反映していると推測される。

(6) 生命科学技術に対する認知・関心の度合いによる分析

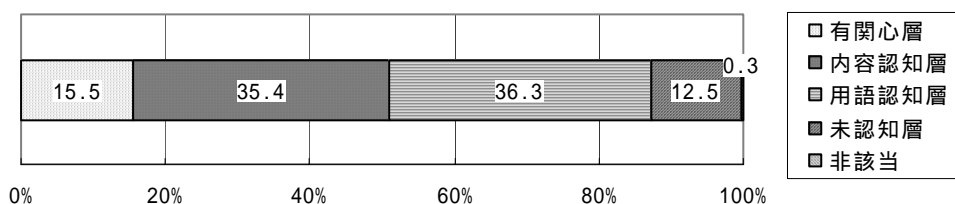
ヒト胚、再生医療、人クローン胚利用のうち、一つでも「利用のあり方について考えたことがある」と回答した回答者を「有関心層」とした。続いて、「有関心層」に分類されたサンプルを除き、一つでも「内容についても何となく知っている」と回答した者を「内容認知層」とした。同様に、既に分類されたサンプルを除き「言葉は見聞きしたことがあるが内容は分からない」と回答した者を「用語認知層」とした。これら以外の回答者、つまり全ての技術に「この調査で初めて聞いた」と答えた者を、「未認知層」として分類した。それぞれの分類が示す生命科学技術に対する認知・関心の度合いの意味は、以下の表のとおりである。

生命科学技術に対する認知・関心の度合いによる分類

有関心層	；生命科学技術の新しい動向について、そのあり方まで考えている層
内容認知層	；生命科学技術の新しい動向について、おおよその内容まで把握している層
用語認知層	；生命科学技術の新しい動向について、情報には触れた経験がある層
未認知層	；生命科学の新しい動向について、ほとんど認知していない層

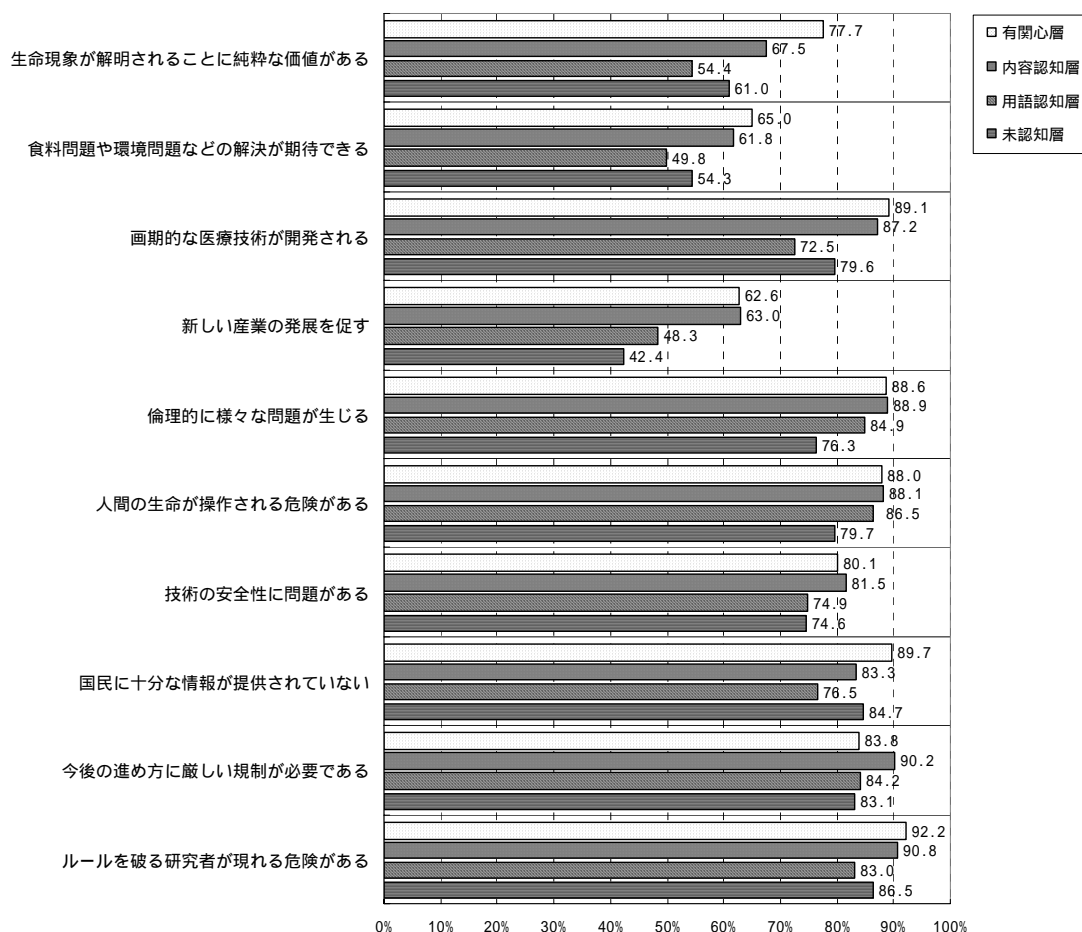
生命科学技術への認知・関心の度合い

〔 全体 〕



生命科学技術への期待と問題意識について、認知・関心の度合い別に見た調査結果を以下に示す。

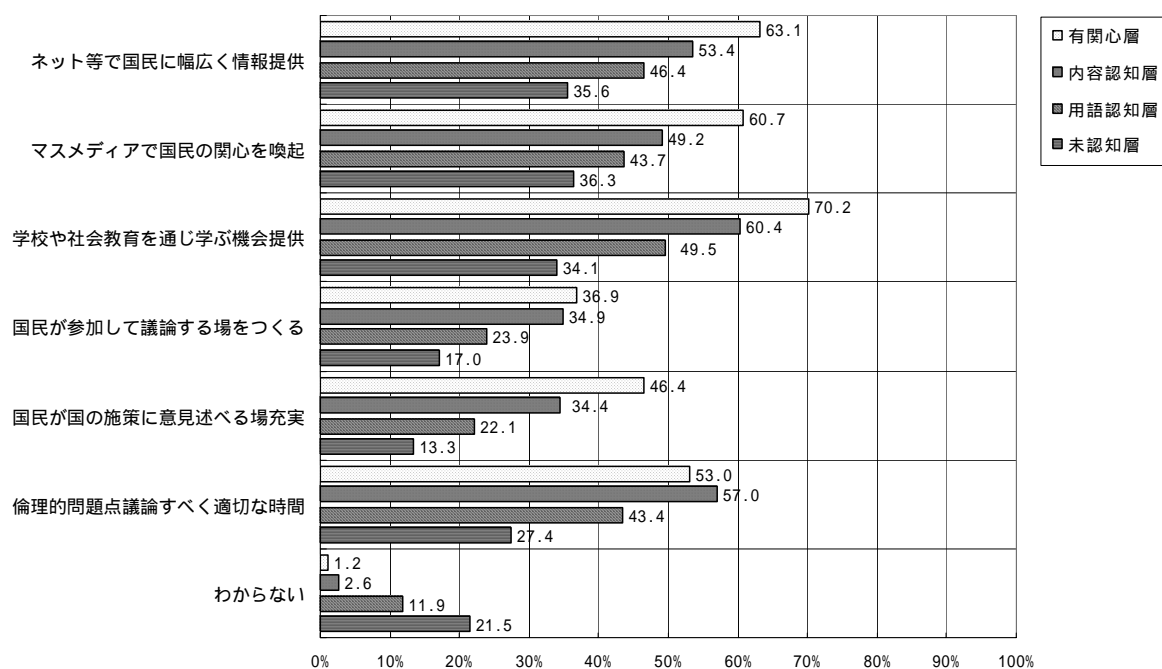
認知・関心の度合いと生命科学技術への期待と問題意識
(各項目に「全くそう思う」+「どちらかといえば思う」比率)



- 生命科学技術に対する期待も懸念も、生命科学技術の動向に対する具体的な知識や思考の深まりに即して次第に高まることが伺える。期待意識については、こうした傾向がより顕著である。

生命科学技術への認知・関心の度合い別に、「国民一般の意見を反映するために充実すべきこと」に対する意識を以下に示す。

認知・関心の度合い別、国民一般の意見を反映するために充実すべきこと



- 生命科学技術の動向に対する具体的な知識や思考の深まりに即して、施策の決定に対する意見表明への関心も高まる傾向がみられ、生命科学技術推進の過程で、国民各層に適切な意見を求めるには、情報提供の推進が不可欠となることが明らかである。